令和二年度
「モラル・エッセイ」コンテスト
優秀作品集

福島県教育委員会

令和二年度　道徳教育総合支援事業

「モラル・エッセイ」コンテスト優秀作品

【　中学生の部　】

最優秀賞	「何気ないけれど大切なこと」	会津若松市立第二中学校	一年	山本　実紀	さん
優秀賞	「母の一言」	南会津町立南会津中学校	二年	芳賀　愛梨花	さん
優秀賞	「親切の連鎖」	本宮市立本宮第一中学校	二年	鈴木　花奈美	さん

【　高校生の部　】

最優秀賞	「つなげる―会津坂下の早乙女踊り―」	会津農林高等学校	二年	山内　里紗	さん
優秀賞	「当たり前だけど、当たり前じゃない」	喜多方桐桜高等学校	三年	大塚　愛	さん
優秀賞	「気持ち」	四倉高等学校	二年	諸橋　琴音	さん

【　一般の部　】

最優秀賞	「具材のない隠し味」	二本松市在住		鈴木　雅之	さん
優秀賞	「私のこころの支え」	矢祭町在住		青砥　安彦	さん
優秀賞	「孤独の中で」	福島市在住		長野　野々香	さん

何気ないけれど大切なこと

会津若松市立第二中学校
一年　山本　実紀

書き留めておかなければ、きっと明日には忘れてしまいそうなこと。そんな出来事の中にも、ふと思い出した時元気になれる一瞬がある。

今年のお盆のお墓参りのことだ。祖父母たちと一緒にお寺を訪れた。水場に置いてある桶に水をくんで墓地に向かおうとしたところ、水場には先客がいらして、花瓶やお供え用の道具を洗っていた。私と姉が後ろに並ぶとすぐさま、

「どうぞ。」

と、噴き出る汗を拭き拭きそのおじさんは順番をゆずってくださった。

「ありがとうございます。」

暑くて少しだらだらした気分だった私は、おじさんの笑顔に爽やかな気持ちになった。蛇口から出る水しぶきも気持ちいい。

お参りをすませ、ご先祖様と一緒に記念撮影。すると先ほどのおじさんが

「お撮りしますよ。」

と、離れたところから声をかけてくださった。

「すみません。ありがとうございます。」

こうして、私達はひとり残らず画面に収まった写真を撮ることができた。

帰り際、車を出そうとした時に、そのおじさんの姿を見かけた母は窓を開けて、再びお礼を述べた。私も笑顔で会釈した。

次にもしどこかですれ違ったとしても、気付くことのないおじさんとの短い短い出会いだったが、私の心に残った出来事だ。

私たちの毎日は、単調のことの繰り返しのように感じてしまう。朝、何とか起きる。授業を受ける。部活をする。宿題。ちょっとだけゲーム。「早く寝なさい」・・・の繰り返し。でも、少しアンテナの感度をよくしたら何気ない毎日の中にも、思わず笑顔になれるような出会いや出来事があるのかもしれない。そんな出会いや出来事を見逃さないよう、そして、あのおじさんのように、誰かの元気の素になれるような自分になりたいと思う。

母の一言

南会津町立南会津中学校
二年　芳賀　愛梨花

私達が生きていく日本は、いったいこれからどうなってしまうのだろうか。

新型コロナウイルスのことが騒がれ始めた頃、正直、外国の出来事なのだからと人ごとのように思っていた。しかし、あっという間に日本にも広まり、とうとう学校が休校になってしまった時には、不安と恐ろしさで胸がいっぱいになった。メディアでは、連日どこで何人が感染しているのか、感染ルートはどうだったのかなどのニュースばかりが聞こえてきたり、目についたりするようになった。自分の身近でも起こるかもしれないと考えるようになり、私は情報に敏感になっていた。そのうち、自分の町で他県ナンバーの車を見かけただけでも、怖いと思うようにもなってしまっていたのである。

しかし、そんなある日、母が

「そういうことも、愛梨花が最近よく口にする「誹謗中傷」になるんじゃないのかな。」と言ってきた。「誹謗中傷」私が嫌いな言葉である。それによって、実際に自ら命を絶ってしまった人や、今まで住んでいた所にはいられなくなり、家族で引っ越しをしてしまった人の話を聞いたことがあるからだ。母と話をし、とても悲しいことを聞かされた。それは、東日本大震災が起こった時、福島ナンバーの車を見ると石を投げつけてきた人達がいたということだ。同じ日本に住んでいて、そんな差別を受けていたなんて。他県ナンバー＝コロナという考え方をしてしまった自分が恥ずかしく思えた。

今、自分たちが考えなくてはいけないことは、この大変な世の中をどう乗り越えていくかということだと思う。まずは、正しい情報や知識が必要であろう。そして、決して人を傷つけるような事を言ってしまったり、偏見で人を見てしまったりしてはいけないということを、私達は忘れてはいけないと思う。私達が将来の夢を叶えて安心して暮らせるように、みんなで明るい未来をつくっていきたい。

親切の連鎖

本宮市立本宮第一中学校
二年　鈴木　花奈美

ある雨の日のお話です。

その日は、まさか雨が降るとは思わないような晴天でした。天気が良かったので、私と友人二人と外で遊んでいました。すると急に雨が降ってきたのです。私は傘を持っておらず、どうしようと不安な気持ちになりました。友人のひとりが折りたたみ傘を持っていたので、三人でぎゅうぎゅう詰めになりながら、歩いて雨宿りができそうなところを探しました。近くのお店の軒先をお借りできることができました。でも、一つの傘に三人で入ってきたので、それぞれに肩や腕がびしょ濡れになってしまいました。この後、どうやって家まで帰ろうかと心配になっていました。

すると、お店のなかから人が出てきて、「お店の傘だけど、もう使わなくなったからもらっていって。」と、私たちそれぞれに傘を差し出しました。なんだか申し訳ない気持ちにもなったのですが、雨もやみそうになかったので、ありがたくいただくことにしました。

そのお店を出て、家に帰る途中、傘をささずに歩いているおばあさんを見つけました。友人が、「この傘をおばあさんに渡そう。」と言って、おばあさんに駆け寄り、「この傘を使ってください。」と差し出しました。おばあさんは一度断られたのですが、先ほどのお店の方の話をすると、「ありがとう。」と言って受け取っていかれました。

私は、友人とまた相合い傘をしながら、帰り道につきましたが、友人と一緒に歩きながら、すがすがしい気持ちになっていました。おばあさんを見つけたときに、すぐさま傘を渡してあげようと考えた友人の優しさや行動力に感心し、すごいなあと思いました。それだけでなく、自分が親切にしてもらったことを、次の親切につないでいくことができた気持ちよさ。そんなことを感じました。

「親切の連鎖。」そんなことがどんどんつながっていけば、みんなが優しく温かい気持ちで生きていけるのではないかと思いました。

つなげる―会津坂下の早乙女踊り―

会津農林高等学校
二年　山内　里紗

「アサアーヨナァ　ァ舞い込んだァヨーナー舞い込んだァヨー」

これは、会津坂下町の伝統芸能「早乙女踊り」の歌の出だしだ。早乙女踊りは七月七日の御田植祭で豊作を願い奉納される。高校入学後の部活紹介で先輩方が披露した踊りに感動した私は、「私もやってみたい。」と思い、早乙女踊り保存クラブに入部した。

元々歌うことが好きだった私は「歌方」となり、先輩から歌の特殊な入り方や間の取り方などの丁寧な指導を受け、今では自信を持って後輩の見本となって歌うことができるようになった。畳を叩きながらリズムを取り、皆と声を合わせて練習していると先輩や同級生の息つぎや言葉のタイミングが分かり気持ちがつながるかのように感じた。

昨年の御田植祭直前には、町の保存会の方々と合同練習をした。最初は「すごいね。」とほめていただき練習をしていくうちに「田植えをする田舎の力強い女の人のように歌うともっといいよ。」と積極的なアドバイスをいただきとても勉強になった。その後、一緒に歌い、その力強い声に安心感を覚えた。

そして昨年私が一番心に残った出来事がある。九十歳のおばあちゃん二人に歌と踊りを教えていただいたことだ。私達は昨年、戦後踊られなくなっていた「扇の舞」を復活させた。おばあちゃん達は十代の頃、この舞を踊っていたのだ。体育館の中で椅子に座り私達の踊りや歌を見て「継承してくれてありがとう。」と言ってくださった。その後、「歌方」だったおばあちゃんが杖を置いて立ち、私達と一緒に歌ってくださった。おばあちゃんの歌に対する気持ちの強さを感じる時間だった。

今年のコロナ禍で御田植祭、その他全ての発表の場がなくなってしまった。しかし、多くの方に協力していただき動画作成を行った。

伝統芸能を継承すること、それは人と人の心のつながりを守ることだと思う。私は、卒業後も早乙女踊りに関わりたいと思う。

当たり前だけど、当たり前じゃない

喜多方桐桜高等学校
三年　大塚　愛

小学二年生の夏、私は父を亡くしました。細かいことは覚えていない、いや、状況の理解ができていなかったということもあり記憶が朧気ですが担架で運ばれてきた父に母が必死に声を掛けている場面は今でも覚えています。

それから五年の月日が経ち、私は中学一年生になっていました。小学生時代の頃とは住む場所も変わっていて、新しい環境で毎日を過ごしていました。しかし、父を亡くしたあの悲しい出来事、いや、そんな言葉で表すことはできませんが、その現実を受け入れて母や周りの友人の支えなどもあり、毎日笑顔で過ごせていました。

そんなある日、二人の同級生が家に遊びに来ました。私は二人を部屋まで案内し、お茶菓子の用意をして戻ると、何とその二人は父の仏壇の前に座り、

「初めまして。お邪魔します。」

と手を合わせてくれていたのでした。今まで他の友人が家に来ることは何度もあったのですが、父に挨拶をしてくれたのはこの二人が初めてでした。私はその時、「本当に良い人達に出会った。」と思いました。

現在の私はもう高校三年生になり、大人に近づく中で、そのような礼儀は当たり前なことなのだと思います。しかし、当時の私達は中学生になりたてでまだまだ子どもだ、と言われる中、そのような行動を誰かに教わるわけでもなく、自分から起こしてくれた友人二人を私は心から尊敬します。そして生涯大切にしていこうと思いました。

この私の大切な友人達は今でも、家に来たら一番に父に挨拶をしてくれます。

気持ち

四倉高等学校
二年　諸橋　琴音

私は「思いやり」は言葉で伝える事以外にも行動で示す事も出来ると考える。

私が中学校二年生のとき、友人のNさんにすごく助けてもらった。私は中学二年生の夏頃にグラウンドを走っていたら右足首をひねり靱帯を損傷し、全治二ヵ月くらいのケガをした。教室が二階で松葉杖をついて歩く自分には階段を上る事が大きな負担であり、治るまでほぼ毎日、保健室で授業を受けていた。しかし、自力ではだんだん授業についていけなくなり、焦りや大きな不安が出始めた。このくらいから泣く夜も増えていった。

ある日、私の友人Nさんが夜の二十時くらいに「どうしたの、最近元気なさそうに見えるよ。」と言って電話をくれた。私はこの言葉に安心し、また泣いた。勉強が追いつかず孤立している感じがして不安で焦っているということを伝えた。Nさんは黙って話を最後まで聞いてくれた。翌日からNさんは保健室に顔を出してくれるようになった。

Nさんに感謝を伝えると「こちらこそ」と笑って返してくれることがほとんどで理由を聞くとNさんは私に「入学式の時一人でいたら声をかけてくれて不安だった学校生活の第一歩を進ましてくれたから琴音にずっと感謝をしているし支えになっていた。」ということを教えてくれた。私にとって何気ない一言や行動だったがNさんにとってはとても大切なきっかけだったのかもしれない。

私は「思いやり」について、誰かを助けたい気持ちや守りたい気持ちがなくても相手を助けていたり支えていたりするのだと思った。また、相手に少しの思いやりを持つと必ず困った時に誰か助けてくれるとも感じた瞬間だった。相手の事を思いやる気持ちは見返りを求めず仲の良い人にかかわらず、周りの人にも自分にとっての当たり前で出来たらいいなと思う。

一般の部最優秀作品

具材のない隠し味

二本松市在住

鈴木　雅之

「マッチ、次に私にやらせて」

順番を争いながら、マッチに火をつける。上手に出来る子は誰もいない。しかし、生き生きとした子供達の姿がそこにはあった。

宿泊学習が、コロナの影響で中止になった。二泊三日の貴重な体験が出来るはずだった小学五年生の息子達。本来であれば、親や家族と離れて初めての宿泊体験になる予定だった。少し大人になった子供の成長を感じることができないもどかしさを強く感じた。

東日本大震災に伴う福島原発の事故が起こったのは、この子達が一歳の時だった。「外には出るな」「砂は触るな」と教えてきた。子供なら、当たり前にする行動でさえ、制限をしなければならなかった。あれから、もうすぐ十年。今は、コロナ禍で様々な制限が同じように行われている。

もしかしたら、私達の無念の想いを感じ取ってくださったのかもしれない。小学校の校長先生や担任の先生は諦めなかった。「体験を少しでもやらせたい」先生達のそんな強い想いで、状況や日時が変更になっても、小学校の敷地で自然体験学習の実現にこぎ着けた。

午前中は、プールでカヌー体験。そして、午後は、かまどを使った自炊体験。準備の段階で多くの方が協力してくれた。五年生にお子さんがいないのに、休日にかまどを作ってくださったＰＴＡの役員の方。孫の為に、二時間以上、鉄板を磨いてくれたおじいちゃん。その他にも、地域の人、カヌー協会の方などの協力があり実現することが可能になった。

このコロナ禍は、社会的な距離を求めつつ様々な行事の機会も奪い、私達の生活を脅かしている。しかし、こんな困難な状況にあっても、様々な立場の人々の想いや絆で、貴重な体験をさせることができた。自炊体験で作った焼きそばの味には、ソースの他にも、具材のない隠し味があったのかもしれない。

私のこころの支え

矢祭町在住
青砥　安彦

私には三つの財産がある。一つは家族。わが家は妻と三人の子ども、父母の七人家族である。婚暦も三十年も過ぎれば世間並みの親父となり、妻も慎ましさが剥がれる。子どもは無事成人し、それぞれの道を進んでいる。父母は高齢ながら元気に野菜づくりに励んでいる。さて、親ともなれば誰もが経験するであろう反抗期の親子バトル。わが子らが中高時代、何度もぶつかった。時には切れることも。父母はそれを横目にしながら私が留守の時、孫たちに上手に言い聞かせた。わが子らは祖父母の教えを素直に聞き入れ、反抗する姿は見られなかった。まさに年季の入った躾であり、同居暮らしのありがたさをつくづく知った。

二つ目は命。私は過去に白血病に倒れ、命を失いかけた経験がある。病名を告知された瞬間、頭は真っ白になり、短い人生にただただ悔やんだ。ところが、幸運にも骨髄バンクでドナーが見つかり、骨髄移植を受け、命を取り戻すことができた。命は親から授かった大切なもの。それを失わずに済んだのはドナーのお陰である。

三つ目は仲間。私は学生時代からスキーに憧れていた。社会人になるとすぐスキー場へ向かった。ところが、いざゲレンデに立つと恐怖に震え憧れは消えた。しかし、それを払拭してくれたのがスキー技術に長けた先輩。以来、スキーにのめり込み、毎シーズンクラブ仲間で滑走を楽しんでいる。思い出も多い。

福島国体冬季大会ではスキー競技役員として審判に携わった。これまでに制覇したスキー場は国内外で六十四箇所。貴重な人生経験である。現在、私は命の恩返しに骨髄バンク活動に努力している。バンク仲間は「一人でも多くの患者を救いたい」という熱い思いがある。そんな仲間たちと活動できることは何よりの幸せである。人生は様々である。モノカネも大事かもしれないが、私はそれ以上に「家族、命、仲間」を大事にしたい。これからも救われた命を守りながら、心豊かに人生を過ごしていきたい。

孤独の中で

福島市在住
長野　野々香

多くの人たちに支えられて自分という存在が成り立っていると気づくのは、孤独になった時だと私は思う。

二月ごろからじわじわと拡大し始めたコロナウイルスの感染拡大は、経済への影響だけではなく、多くの人に先の見えない不安・孤独感などの負の感情をもたらした。私も例外ではなく、孤独の中で就職活動を行っていた。自分自身を見つめ直すという意味では有意義な時間を取れてはいたのだが、自己分析を進めるにつれ自分の嫌な点ばかりが気になってしまった。通常であれば親しい友人と笑い合っているだけで前向きになれたはずなのに。

そのような日々を過ごす中で教育実習が近づいてきた。実習に行くにあたり高校時代の恩師にメールを打ち、自信が無いこと、将来に不安しかないこと、就きたい職業を見つけられないこと・・・。自分の弱い部分をすべて吐き出したような気がする。

しばらくして先生から「あなたの武器はその人柄です」と返信が来た。涙があふれた。見失っていた自分の良さを再発見できるありがたい言葉で、こんな私でも誇れるものがあるのだと自分を取り戻すきっかけとなった。

その後、久しぶりに大学の友人と会った。彼女はコロナ禍の中でも目標を持って努力していて以前よりも輝いているように見えた。その姿を見ていると悩んで立ち止まってしまった自分が恥ずかしかった。少しずつでもいいから前に向かっていこうと思えた。

コロナウイルスによって何気なく過ごしていた日々が大きく変化し、私は一人で生きているのではないと実感させられた。つまらなく、何もない、幸せな日常が早く戻ってくることを願う。